

“Shugendō:

The History and Culture of a Japanese Religion  
(L'histoire et la culture d'une religion japonaise),  
édité par Bernard Faure, D. Max Moerman, Gaynor  
Sekimori, *Cahier d'Extrême-Asie* 18 (2009)

École française d'Extrême-Orient Centre de Kyoto  
304pp. ¥6000

ポール・スワンソン

本書は École française d'Extrême-Orient Centre de Kyoto (フランス極東研究所京都部) が編集・刊行している年刊学術誌 (*Cahiers*) の「修験道」特集号であるが、学術誌の一部というより書籍・論文集として扱ったほうが適切である。二〇〇八年四月に米国コロンビア大学で開催された修験道をテーマとした特別会議で発表された研究をもとに編集され、この分野で著名な欧米研究者や日本の修験道研究を代表する研究者を含めた記念すべき大会議であった。この会議は欧米での修験道や民俗宗教研究の先駆け(「先達」ともいべきか)として知られている University of Cambridge の Carmen Blacker 博士の研究を記念し、献じられている。

この会議の発表をもとに、フランス語や日本語の研究が英訳され、フランス語の「概要」を付されている。もともと日本語の論文は下記で日本語タイトルのまま記しているが、全て英訳

されている。その内容と意義を簡単に紹介したい。

“Introduction.” Gaynor Sekimori & D. Max Moerman

編集者が「序文」として修験道について、また、修験道研究の意義について再検討し、国内・国外の修験道研究の発展を簡単に説明している。修験道の研究は他の分野(仏教学や各宗学、神道、民俗学一般など)と比べて、いまだに研究が少ないことを指摘している。二〇世紀初頭には宗派的な研究が目立っていたが、戦後は村上俊雄、和歌森太郎、堀一郎などの学術的研究に発展し、その後は五来重と宮家準の大業績、そして各地方(戸川安章、など)の細かい研究が蓄積されたことを紹介している。海外でも修験道研究は比較的少ないが、ドイツ語・フランス語、英語などで発表されてきた研究を紹介している。最後に論文集の内容を紹介し、「現代修験道の定義」(Bouchy, Sekimori)、「歴史の中の修験道」(宮家、佐藤、関口、Rambelli)と「修験道の文化」(鈴木、大内、鈴木)のテーマでまとめている。

Anne Bouchy, “Transformation, Rupture and Continuity: Issues and Options in Contemporary Shugendō.” (英訳: Jessica Hackett and Katelyn Aronson)

「変動、断絶、継続」をテーマに、現代修験道の事情に鑑みながら「修験道」の定義を再検討する。「修験道」は宗教・象徴・儀式的な様相のみならず、社会、経済、政治、組織、思想、歴史、地理、技能、真理、人間的ないろいろ

な様相を含む現象であり、その複雑な有様を見逃すべきではない、と強調している。また、ローカルな修験グループの現代的発展と、修験道における秘密性とスペクタクル化(“spectacularization”)に注目し、さらに「女人禁制」と修験道における女性の参加について検討した上で、現代の修験道の行方を論じている。

Gaynor Sekimori, “Defining Shugendō Past and Present: The ‘Restoration’ of Shugendō at Nikkō and Koshikidake.”

日光と甕岳の修験道を取りあげ、その歴史と現状を紹介・説明することによって、「修験道」の定義を再検討する。また、日光と甕岳での儀式の復興を細かく分析し、修験道の、特に在家参加者としての現状に注目する。

宮家準「日本の山岳信仰——修験道の展開と社寺」(Japanese Mountain Religion: Shrines, Temples, and the Development of Shugendō) (英訳: Miyabi Yamamoto and Gaynor Sekimori)

修験道の歴史と展開を古代から現代まで、特に山の社寺との関係を中心にみて、簡潔に紹介する。著者の日本語での研究業績が膨大であることは言うまでもないが、英語で紹介されることは海外の宗教学者にとってありがたいことである。

佐藤弘夫「山岳観の変遷と修験道」(Changes in the Concept of Mountains in Japan) (英訳: Orion Klautau)

日本の歴史において、「山」がどのような意義をもっていたか、またそれがどのように変容していったかについて検

討する。神南備としての山、修行の場としての山、靈魂の住処としての山、浄土としての山、彼岸としての山、現代の「墓場」としての山、など、修験道のみならず、日本の宗教の重要な様相としての「山」を分析している。

関口眞規子「三寶院門跡と「當山」派棟梁の誕生」(The Sanbōin Monzeki and its Inception as Head Temple of the Tôzan Group) (英訳: Gaynor Sekimori)

醍醐寺三寶院門跡の歴史と修験道當山派の本部としての役割、特に近代(一七世紀)以降の展開(「修験道法度」など)による本山派・當山派の組織化、などを紹介する。

Fabio Rambelli, “Dog-men, Craftspeople or Living Buddhas? The Status of Yamabushi in Pre-Modern Japanese Society.”

近代以前の日本社会における山伏の社会的地位について検討する。まず山伏の自画像を取りあげ、一般社会からは天狗・非人・職人・芸能民、あるいは「生き仏」などとして見られ、いろいろな社会的活動をした山伏を描写する。山伏は日本の社会では「仲介者」(mediator)としての役割を果たしてきた、と指摘している。

鈴木昭英「蔵王権現垂迹説話の展開」(The Development of *Suijaku* Stories about Zaō Gongen) (英訳: Heather Blair)

金剛蔵王菩薩・蔵王権現の出現の経緯、金峯山での発展、蔵王権現の図像、説話における蔵王権現、本地仏と蔵王権現、などの細かい分析によって蔵王権現の由来と日本の歴史のなかでの神仏習合・本地垂迹的役割を説明する。

Uchi Fumi, "The Lotus Repentance Liturgy of Shugendō: Identification from Vocal Arts" (大内典。英語で執筆)

修験道における法華懺法の内容と役割、また修験道の儀式における「音」と「音声」の重要性に注目している。特に「秋の峯」における「音」を細かく紹介している。また、天台仏教の法華三昧が「法華懺法」に展開していった内容を紹介し、静かに観想するより音声を通しての儀式(読経、懺悔、声明など)の重要性を指摘している。事例として羽黒修験道における法華懺法を分析している。

鈴木正崇「熊野信仰と湯立神楽」(Kumano Beliefs and Yudate Kagura Performance) (英訳: Gaynor Sekinori)

「湯立」について簡単に紹介してから、熊野における「お湯」の重要性に注目し、特に熊野を中心に「湯立」と「神楽」の関係とそれが熊野以外の地方にどのように広まっていったかについて歴史的展開を説明している。

論文集の後に細かい参考文献のリストが添付され、今後の研究にとって貴重な情報を提供している。さらに「空也」や「婚姻の民族的研究」に関する短い研究報告も含まれている。最後に、フランス語での書評(藤原貞朗著『オリエンタリストの憂鬱』、評者彌永信美)、また、海外における熊野と修験道研究についての力作である Max Moerman, *Localizing Paradise: Kumano Pilgrimage and the Religious Landscape of Pre-modern Japan* に関して Robert Duquenne が細かい紹介・書評をしている。

内容の説明が長くなったが、この説明で明らかのように、この論文集は多様多彩で充実した内容で、多くの研究者・編者・翻訳者が加わった労作である。欧米での修験道研究はまだ少なく、この論文集は海外での修験道、神仏習合、また日本の宗教全体の研究にとって貴重な材料である。この論文集を通して、日本語が読めない多くの宗教学者が日本の宗教史とその現状について多くを学べるのが期待できる。